

(一般 ICT)

**ともに学び、ともに高め合う子どもを育てる
～アクティブ・ラーニングを通じて、やりとげる力、つなげる力、支える力の育成～**

大阪市立本田小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本田小学校では、平成 25 年度より大阪市の『学校教育 ICT 活用事業』の先進的研究推進校として、ICT 機器を効果的に活用した授業づくりに取り組んでいる。

昨年度は、「課題の発見と解決に向けて、子どもが主体的・協働的に学ぶことができる授業づくり（学習計画、教材研究）を行う。（アクティブ・ラーニング）、グループや集団で協働的な活動を行う場面を作り、話し合い深め合うことで子どもたちが課題解決ができるようにする。（21 世紀型スキル）」の視点で、『小集団において、子どもたちが活発に意見を交わす（コミュニケーション）、協働で学習する（コラボレーション）することにより課題解決ができる授業づくり』を行ってきた。指導者や子どもたちが ICT 機器を活用して、それぞれの学年や発達段階に応じて、ペアや 4 人組などの小集団でコミュニケーションを活発にできるような学習計画や場の設定、発問を工夫することができた。また、意見交流する中で、自分の考えと同じところや相違点を明確にして比較しながら聞き、その上で、意見や考えを練り直し思考や知識の再構築させる授業スタイルを模索することができた。このように、ICT 機器の最新の機器を使える力をつけることが目的ではなく、ICT を活用した学びの共有を目指して授業づくりを行なってきた。その結果、コミュニケーションやコラボレーションに対する指導者の意識が高まり、様々な形態で話し合いを取り入れることで、子どもたちが、学び合い、高め合う姿が多く見られるようになった。

ただ、意見交流する中で、子どもたちが自分の考えを分かりやすく相手に説明する力がまだまだ不十分であり、友だちの意見を聞いて比較思考するための聞く力が定着したとはいえない。また、コミュニケーションを生かしてコラボレーションする過程においては、その質を高めていく必要がある。このような成果と課題を生かし、子どもたちの『やりとげる力、つなげる力、支える力』を養い、本田流 21 世紀型スキルの育成を目指す。その手段として、アクティブ・ラーニングを取り入れ、ICT 機器は、アクティブ・ラーニングの学習ツールとして活用する。

2. 研究の内容

(1) 教科の本質を追究する。

①教科学習における基礎基本の徹底、アクティブ・ラーニングのための学習スキルを共通理解する。

○ 理数（算数、理科など）、表現・運動（音楽、体育など）、ことば（国語・社会など）の 3 つの領域部会を作る。（学年各 1 名ずつ）

→それぞれの教科の目標を達成させるための授業づくり（コミュニケーション・コラボレーションの要素を取り入れる）

→子どもたちが主体的・協働的に学ぶための「調べ方、ノートを取り方、話し合いの仕方、発表の仕方、話の聞き方、ふりかえりの仕方」などの学習スキルを模索する。

(2) 21 世紀型スキルの育成のためのアクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくりを行う。

○ アクティブ・ラーニングを行うための学級づくり

→「学級力向上プロジェクト」（早稲田大学教職大学院 田中博之教授著）を参考に行う

○ アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践

(3) 各学年に応じた情報活用能力の育成（情報モラルを含む）

○情報活用能力観点別一覧表について見直し、本田モデルを再構築する。

3. 研究の方法

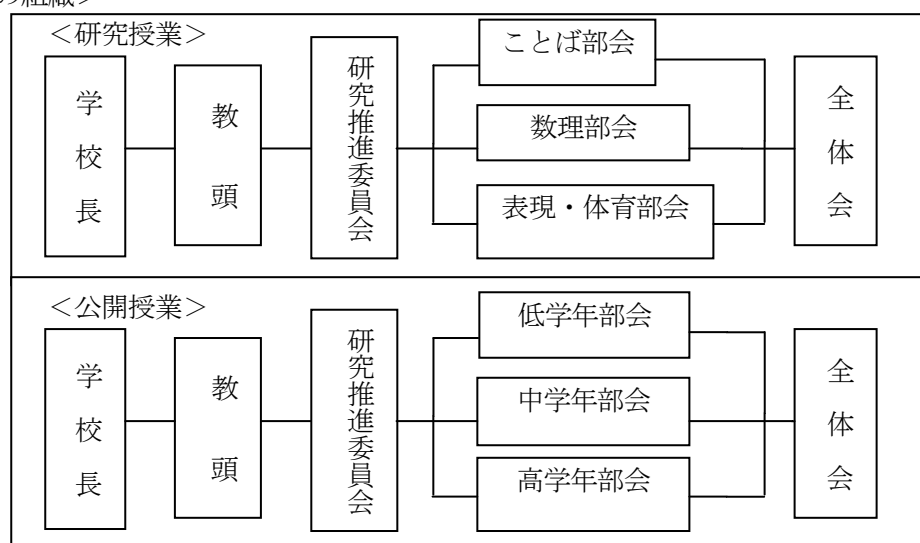
- ① 「学校 ICT 活用事業」における公開授業の実施(低・中・高学年部会)
- ② 校内研究授業の実施(各領域部会)
- ③ 提案授業の実施
- ④ 研究通信の発行(研究授業について…各学年
研修会について…研究部)

<21 世紀型スキル>

創造性とイノベーション コミュニケーション
コラボレーション 批判的思考・問題解決・意思
決定 学び方の学習・メタ認知 情報リテラシー
ICT リテラシー シチズンシップ
人生とキャリア発達 個人の責任と社会的責任

- ⑤ 各種研修会への参加(がんばる先生など)
- ⑥ 校内研修会の実施 (国語・算数など)
- ⑦ 研究事例の集積
- ⑧ 研究紀要の作成

＜研究の組織＞



4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ICTを活用することで、子どもたちが人とつながる場面が多くみられたこと、コミュニケーション能力が育成されることで、学びの方向が広がり、学びが深まった。
 - ・ICTを活用することで、子どもたちが人やモノや事などとはつながる場面が多くみられるようになった。そのことにより、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が育成された。また、進んで課題解決に取り組む姿勢が見られたり、友だちと切磋琢磨しながら協働で課題解決したりする姿が見られるようになった。
- Skypeなどの利用により、空間を超えた交流が可能になり、子どもたちが新しい世界に出会う機会が増えた。
 - ・空間を超えた交流を多く取り入れることで、子どもたちがなかなか出会えないような新しい世界と出会うことが可能になり、興味関心や意欲を持って取り組む子どもたちの姿が多くみられた。
- 情報活用能力の育成により、情報にあふれる時代を生きるために必要な力を身に付けることができた。
 - ・情報モラルの実践を通して、情報活用能力の育成にも取り組み、あふれる情報を全て受けるのではなく、上手く取捨選択し処理できるように工夫することも学んだ。

(2) 今後の課題

- コミュニケーション能力の更なる向上
 - ・コミュニケーション能力が身についてきたと述べたが、子どもたちが自分の考えや意見を主張することに主眼をおき、話し合いの中で自分の考えを変容させたり、再構築させたりする力がまだまだ弱い。この力の育成のために、協働的な学びの育成の更なる充実が必要である。
 - ・次年度は、子どもたちの学びにおいて形成的評価を行うために、ポートフォリオ評価も取り入れていくようにする。子どもたちが自分自身の考えの変容を自分自身でメタ認知しながら学習できるように研究を進めていくことが必要であると考えられる。
- 評価方法の工夫
 - ・パフォーマンス評価を取り入れていくことにより、スキルの育成にも形成的評価を行い、子どもたちの主体的・対話的・協働的に取り組む姿勢を育成していきたい。
 - ・今後も、アクティブ・ラーニングの多面的な評価法を研究し、本田小学校版のルーブリックの作成を目指す。